KOBE COLLEGE NEWSLETTER

Vistas

"Beauty Becomes a College"

31

2017•June

◉Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学

3 診察室

◉舞踊専攻開設10周年記念

日本のコンテンポラリーダンスを牽引する大学として

―世界トップクラスの舞踊教育を実現―

〈対談〉斉藤言子（神戸女学院大学 学長）
島﨑 徹（神戸女学院大学 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 教授）

食品成分の抗酸化性を分子レベルで解明する――5
―食生活と健康を支える機能性分子―
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科　寺嶋 正明 教授

一人ひとりの患者がより生きやすくなるために――9
精神保健福祉士　渕脇 綾乃 さん

◉クローバーゼミ開設記念
多角的な視点を持ち、自ら学びを深める新スタイルのゼミ――11

◉NHK BSプレミアム「美の壺」：<心のふるさと 学び舎>でも紹介
〈ツアー・マイスター〉
国の重要文化財建築を案内して魅力再発見！――13

◉英文学科<フィールドスタディ>：ポーランド共和国
「戦争と平和」ポーランドの歴史と文化から現在を学ぶ――14

◉産学官連携への取り組み
〈にしのみにゃ部〉フェリシモ×西宮市の企業×学生のコラボレーション
自由な発想による商品開発で、地域の活性化に貢献――17

◉熊本地震、被災地でボランティア
日常が壊れた現場を目の当たりにする――18

◉1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」：奨励賞 受賞
「防災ウォッチ」：地域創りリーダー養成プログラムが評価！

KCインフォメーション――19

◉舞踊専攻開設10周年記念

日本のコンテンポラリーダンスを牽引する大学として

――世界トップクラスの舞踊教育を実現――

●神戸女学院大学 学長
斉藤 言子――SAITO Kotoko
×
●神戸女学院大学 音楽学部 音楽学科 舞踊専攻 教授
島﨑 徹――SHIMAZAKI Toru

神戸女学院大学の音楽学部 音楽学科 舞踊専攻は昨年、開設10周年を迎えた。開設に尽力したのは、当時、声楽専攻の一教師であった斉藤言子学長と、海外を中心に振付師として活躍する島﨑徹教授。この10年間を熟知するふたりが、開設までの過程や日本の大学における舞踊教育の必要性、舞踊専攻生の活躍等について語り合った。

"South" ［構成・振付・演出］島﨑 徹 ［写真撮影］吾心不二 氏

日本にも本格的な舞踊教育を

斉藤学長　本学の舞踊専攻はこの10年で素晴らしい形に仕上がったように思います。その過程で、島﨑先生には多大なるご尽力をいただきました。

島﨑教授　大学という組織を動かすには時間がかかります。当時、斉藤先生は開設の賛同を得るために大変な労力を要されたでしょうね。

斉藤　私は着任当初から、音楽学部に舞踊専攻をと思っていました。舞踊と音楽は舞台上で一体化する総合芸術であり、必要な双璧。アメリカでは、音楽学部を持つ総合大学には必ずDance Department（ダンス部門）が設けられています。日本には多くのバレエ教室があるものの大学への道は殆ど通じておらず、あっても舞台芸術学科の中の1コース。踊ることが好きなのに断念する子をたくさん目にし、そうした学生達が本学でリベラルアーツを身に付け、舞踊の技術を学ぶことが出来ればと想いは増す一方でした。

舞踊専攻の開設は、何かに導かれるように島﨑先生と出会ったことが始まりです。２００３年の夏、私はローザンヌ国際バレエコンクール講習会を見学しに行き、そこで紹介された日本事務局長に舞踊専攻を作る夢を語りました。事務局長は「それは面白い！ 重要なのは、フリーランスで活動しており総合的な指導ができる教師を選ぶことです」と、海外でご活躍中の島﨑先生の連絡先を教えて下さいました。

その秋、繋がらないことを承知で電話してみると、宝塚にいらっしゃり、翌朝1時間だけなら空いているというではないですか！ ちょうど入学試験の日で、私が動けるのもその1時間のみ。お会いできたのは奇跡でした。

島﨑　あの時期、僕は宝塚歌劇団の振付をしていました。クラシックバレエでは、18歳になるとある程度結果が出ている。大学で本格的な舞踊教育を目指すなら、大人としてのアイデンティティを確立し自己表現するコンテンポラリーダンスが適していると話しましたね。

斉藤　そうです。ちょうど学内では理事が各学部の若手教師の意見を聞く学院構想委員会が設けられていました。そこで島﨑先生から伺ったお話を伝え、開設を提案。裏付けるデータ等も提出したところ、理事の「いいじゃない」というひと声により、異例の速さで承認されたのです。開設をお任せする教師には吸引力が必要。島﨑先生をおいて他にはいないと、確信をもってその旨をお伝えしました。

島﨑　自分がやるとは思わず提案していたので考えましたよ。当時、僕は日本の舞踊界のあり方に疑問を抱き、東京から那須高原への移住を模索していたんです。半自給自足生活で舞踊を続けていこうとしており、銀行からの融資も購入する土地も決まっていた。それが持ち主の都合で延期になり、突然、教師になる話が来た（笑）。

そこで僕はシュミレーションしてみたんです。学生を4年間一生懸命教えたら、かなり面白いものができる。僕は自分の芸術を具現化するために必死になって学生のレベルを上げる。でも、学生にとってそんな先生はどうなのか？――僕が学生ならそんな風に自分を高め続けている先生に学びたい。これは全然悪くないぞと考えが成立し、引き受けることを決めました。

斉藤　私が講習会に行ったり電話をかけたりする時間を得られたのは、いずれもレッスンが急遽キャンセルになったからです。島﨑先生の移住延期といい、舞踊専攻開設のためにそういう道筋が通っている。まさに神の采配だと思いました。

世界水準の教育体制を目指して

斉藤　開設前に開いた夏期講習には定員が30名のところへ150人も集まり、急遽日程を増やして受け入れましたね。受験者数も大変なものでした。

島﨑　開設記念公演にはベルギー王立ロイヤル・フランダース・バレエスクールの生徒さん達が自費で公演に来てくれました。斉藤先生も本学の記念歌を歌われましたね。

斉藤　よく覚えています。舞台は芦屋のルナホール。島﨑先生が王立バレエ学校の卒業公演で振付なさった作品を披露して頂きました。あの時の衝撃的で素晴らしい空気は、今でも本学の舞台に引き継がれていると感じます。

島﨑　教育を途中で改革するのは大変ですが、最初によいものを創れば、後は自然と受け継がれていくと思うのです。

斉藤　その後も島﨑先生のコネクションにより、ヤン・ヌイッツ氏や吉田都氏をはじめ、バレエ界では神様のような存在の方々を客員教授と

◀音楽学科舞踊専攻 開設記念公演のチラシ

10th Anniversary Dance Major
Department of Music

上賀茂神社での舞台に出演

TARI'14 ダンスフェスティバルの稽古場で（マレーシア）

してお招きすることが叶いました。ヤン氏は20世紀バレエ団やネザーランド・ダンス・シアター（NDT）等でソリスト、プリンシパルとして活躍した方、吉田氏は英国ロイヤルバレエ団等で10年以上プリンシパルを務めた方です。島崎先生や彼らの指導のもと、多くの学生が世界に通用する実力をつけ、巣立って行きました。

島崎　現在、コンテンポラリーダンスの最高峰であるオランダのNDTⅡや、日本で唯一、劇場付きの舞踊団であるNo-ism等で卒業生が活躍しています。先日も、アメリカで第一のコンテンポラリーカンパニーと言われている、Hubbard Street Dance Chicagoのオーディションにて550人の中から3人という狭き門に5期生の一人が合格しましたし、昨年度3年生として在籍していました学生は、今年の8月よりドイツのレーゲンスブルグと契約しました。もちろん、在学生も頑張っていますよ。2014年5月には世界遺産の上賀茂神社にて、葉加瀬太郎氏と能楽師・梅若玄祥氏とのコラボレーション舞台、JAKMAKに出演、その後、11月にマレーシアで開催されたTARI'14ダンスフェスティバルに参加。15年はベルギーの「MONS 2015 JAPAN MOVE」で公演。16年は台湾の芸術祭典「Kuan Du Arts Festival」に招待されました。職業としてプロダンサーを目指す人にとって本学の舞踊専攻はかなりいい線を行っており、学生の真剣さ、表現する踊りのレベルは世界と比較しても引けを取らないと思います。

圧倒的な存在であるために

斉藤　教育ツールとしての舞踊については、どのようにお考えですか？

島崎　非常に有効だと思います。子どもと違い、大学生は僕達のことを「教師」としてだけでなく、葛藤や弱さも含めた一人の「人間」として見ています。僕はいつも、学生にとって「とにかく圧倒的な存在でいたい」と思っています。家庭で親御さんが子どもを叱らないような今の時代、「この人の言うことは聞かないといけない」と感じさせる大人の存在が必要です。そのような存在であり続けるために、苦しみ、もがき続け、それによって進化していく自分自身の姿を見せることも、一つの教育ツールとしてありだと思うのです。

斉藤　島崎先生の舞踊に対する情熱は学生に伝わっています。皆、3月の卒業公演に向け、冬休み中も毎日、練習に励んでいましたね。

島崎　はい。それを可能にするために、まずは私自身の体調管理が求められます。年とともに苦しいところがありますが、やはり楽しいです。ただ、学生の中にはサボりたかったり、ヤル気の出なかったりする学生もいます。彼女達は「好きだから踊る」と思っていますが、これは順番が違う。稽古に行きたくない日も行って行って行き通し、必死にやるから好きになるんです。学びとは持続性であり、何かを成し得る人はそこをわかっています。

斉藤　歌の世界も同じです。心に入って来ない曲を嫌々ながらでもずっと練習していると、ある日突然「なんて素敵な曲！この歌大好きだわ」と思う時が必ず来る。そこが専門的な学びを深めていくための新たな出発点です。このことは舞踊や声楽に限りません。

学生一人ひとりのベストをより高いラインへと導く

島崎　努力だけでなく、生まれもった才能もカウントされるのが芸術の世界です。僕達は学生一人ひとりの持つ才能を見極め、それぞれが自分の理想とする人間に近づくためのオリジナルな術を見出せるよう手助けすることを仕事だと考え、教育しています。だからこそ、前述の第一線で踊っている人達を筆頭に、卒業生の活躍の場は幅広いものになっているのです。

斉藤　ディズニーランド®やユニバーサル・スタジオ・ジャパン®等で踊っている卒業生もいますね。

島崎　自分のダンススクールを設立した人や、ヨーロッパで仕事を得るためにハンガリーの舞踊学校に留学している人もいます。それぞれの個性が生かされるのはどういった場なのか？それを一緒に考え、教えられるのは少人数制のよいところです。

世界に名を馳せる舞踊専攻を

斉藤　ローザンヌ国際バレエコンクールにクラシックとコンテンポラリーの審査があることは世界の常識であり、両方踊れないとダンサーとして認められません。しかし、日本にコンテンポラリーが入って来たのは遅く、未だにきちんとしたメソッド、テクニックを教えられる指導者は殆どいません。今後は本学の舞踊専攻で育った学生達が全国にコンテンポラリーの種を蒔き育てていく役目を担っていくことになるでしょう。島崎先生は今後について、どのようにお考えですか？

島崎　僕は就任時、「世界一の舞踊専攻を作る」と宣言しました。既にその実力は備えており、後は多くの人に知ってもらうだけだと思っています。レベルアップとして舞踊専攻への志願率を今の5倍にしたいし、10倍になれば海外からも注目されるでしょう。今までの広報の仕方とは違い、ダンスをしている高校生に接する機会を設け、海外も視野に入れた受け皿を設ければ、あっという間に志願者は集まるはずです。まず僕自身がダンスの盛んな高校へ赴くのがよいでしょうね。例えば、「島崎徹によるダンスクリニック」を開催する。高校を選抜し、無料で徹底的にダンス指導をするんです。

　また、本学をクリニックにし、学外の先生方が相談できる場所を作ることも考えています。例えば、地域のバレエ教室の先生が自分の生徒の中からローザンヌに行ける子が出てきたけれど、コンテンポラリーをどうすれば…という際に、相談できる場所です。そういうアートクリニックを設けて信頼を得ることが出来れば、必然的に舞踊専攻の知名度は上がる。せっかく専門家がたくさんいるのだから、音楽学部全体でやってもいいですね。楽器の選び方や不明点などをスペシャリストとして一般の方にレクチャーする。これは地域貢献にも繋がりますよ。

斉藤　それはよい考えです。世界に通用する実力があり、時代は進んでいるのだから、ぜひ実現させましょう！

　本日は島崎先生とお話し、初心を思い出すと共に、新たな活力を頂きました。ありがとうございました。

稽古に行きたくない日も行って行って行き通し、必死にやるから好きになるんです。
本学の舞踊専攻で育った学生達が全国にコンテンポラリーの種を蒔き育てていく役目を担っていくことになるでしょう。

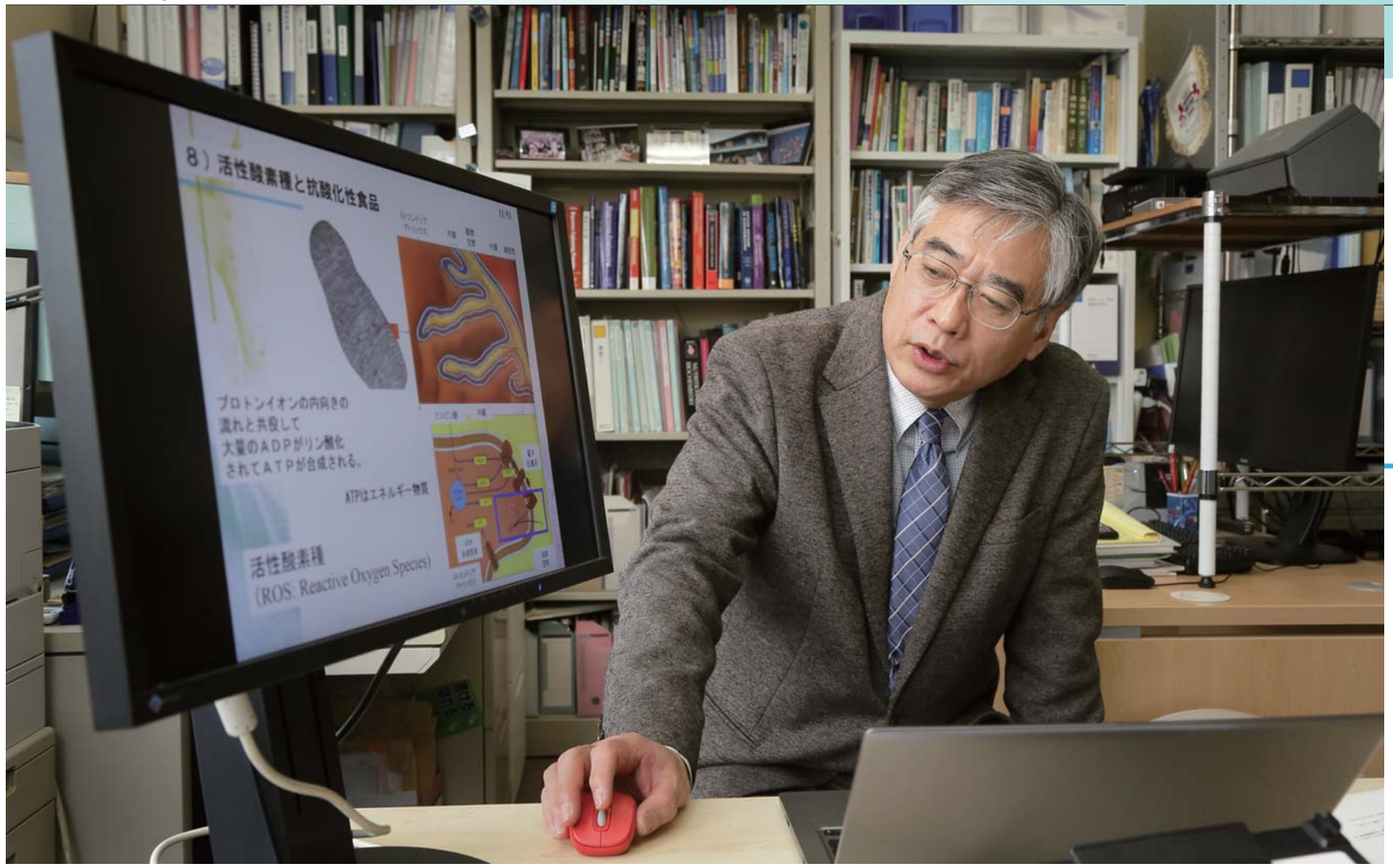
"For James"
［構成・振付・演出］島崎 徹［写真撮影］吾心不二 氏

"South"
［構成・振付・演出］島崎 徹
［写真撮影］吾心不二 氏

■**斉藤言子**（さいとう・ことこ）
神戸女学院大学学長。神戸女学院大学音楽学部、同研究生修了後、ミラノヴェルディ音楽院に学ぶ。1992～1993年、南カリフォルニア大学客員研究員。専攻は声楽。1999年より神戸女学院大学音楽学部教授。日本やイタリア、アメリカにて多くのオペラに主演し、数々の国際コンクールで上位入賞を果たす。平成21年度和歌山市文化功労賞受章。関西二期会副理事長、日本演奏家連盟会員ほか。

■**島崎 徹**（しまざき・とおる）
神戸女学院大学音楽学部音楽学科舞踊専攻教授。カナダにて舞踊全般の教育を受け、振付家として世界的に活躍。その作品はヨーロッパを中心とする各国の舞踊団のレパートリーになっている。1999年、2011年にはローザンヌ国際バレエコンクールの審査員を務め、同コンクール課題コンテンポラリーダンスの振付も担当。近年は宝塚歌劇団や東宝ミュージカルなどの振付を手掛ける一方、シルク・ドゥ・ソレイユのキャスティングパートナーを務める。2005年より神戸女学院大学教授に就任。

10th Anniversary Department of Music Dance Major

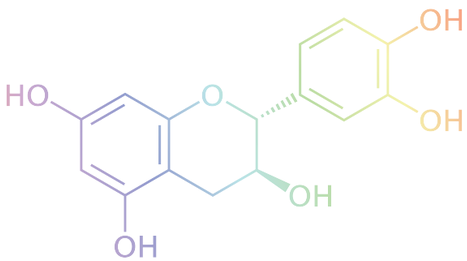


食品成分の抗酸化性を分子レベルで解明する

――食生活と健康を支える機能性分子――

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
寺嶋 正明 教授―― *TERASHIMA Masaaki*

日本は世界トップクラスの長寿国であり、2000年にWHO（世界保健機関）が「健康寿命」を提唱して以来、いかに健康に生活できる期間を伸ばすかということに関心が高まっている。老化を避けることは出来ないが、健康長寿の阻害要因とされる生活習慣病には体内で発生する活性酸素が関わっており、食品に含まれる抗酸化成分がその働きを抑えることは明らかになってきている。生化学的手法や生物工学的手法を利用し、アミノ酸やペプチドなど様々な食品成分の抗酸化性を研究する寺嶋正明先生に話を聞いた。



◉食品成分の機能性を分子レベルで研究する

――ご出身は工学部だそうですね。

私が中高生だった1970年代前半は、高度経済成長が進んだ結果、大気汚染や水質汚濁、廃棄物の増大などの環境問題が社会問題化してきた時代でした。そこで、環境に優しい方法で物づくりをしたいと考え、大学で化学工学を学びました。生物の力を物質生産に利用する生物化学工学と出会ってその道に進み、アメリカへ留学して遺伝子工学、タンパク質工学を学びました。植物細胞培養による治療用タンパク質の生産等に関する研究に携わっていたことと、食品に関する研究をとの要望もあり、神戸女学院大学で食品中に含まれるタンパク質や、消化により生じるペプチドのもつ生理的な機能の分析に着手することになりました。工学部時代には、培養工学やタンパク質工学に関する研究を行っていましたから、まさか自分が将来、女子大で教鞭を執るとは夢にも思っていませんでした（笑）。

――ご専門の食品分子機能科学とは、どのような学問なのでしょう？

食品に含まれる様々な成分の機能性を、バイオサイエンスの手法により分子レベルで明らかにしていく学問です。私の研究は主に抗酸化性に関するものであり、大学院生、学部学生と共同し、テーマ毎に幾つかのチームに分かれて取り組んでいます。学生が卒業する度に新しい研究を始める訳ではなく、一つの分野を少しずつ進歩させる…バトンを渡し繋いでいくスタイルですね。私の主な役目は、それらの研究を統括し、論文にまとめて世に送り出すこと。論文発表することで、その成果が世界のどこかの研究者の研究に取り入れられ、新たな発見に繋がっています。

様々な食品成分の抗酸化性についてまとめられた卒業論文

――学生と共に研究を進めるのですね。発表論文におけるテーマの推移をお聞かせください。

まず、2006年度の卒論では茶飲料を扱いました。市販の「ヘルシア緑茶」や「お～いお茶」「黒ウーロン茶」など複数の茶飲料に含まれるポリフェノールに着目し、それぞれの抗酸化性を評価しました。結果としては、「ヘルシア緑茶」の抗酸化性が強かったですね。これら茶飲料は原料となる茶葉が同じです。では、異なる植物はどうだろう？ということで、07年度はハーブティの抗酸化性を。09年度は植物に含まれるフラボノイド類を評価しました。

10年度に入ってからは、テーマを液体から個体成分に移し、キャベツやチンゲンサイなど10種以上の野菜の抗酸化性を評価しました。この時は、実験を進める中でダイコンの首と真ん中、先端部分では味が違うけれど、抗酸化性は異なるのか？という学生の疑問をもとに、野菜を部位ごとにすり潰し、遠心分離して評価するという実験も行いました。このように、学生の疑問から新しい実験項目が増えることは少なくありません。結果としては、首、真ん中、先端部分のどれもが同じ。つまり部位による抗酸化性の違いはないということが明らかになりました。

――その後は、調理された食品の評価もされていますね。その理由は？

野菜と同様、私達は食品や成分をそのまま摂取するわけではなく、調理された状態で体内に取り込みます。そこで2010年度は、豆類のほか、トムヤムクンやミネストローネなどのスープ類や味噌の抗酸化性も調べてみました。

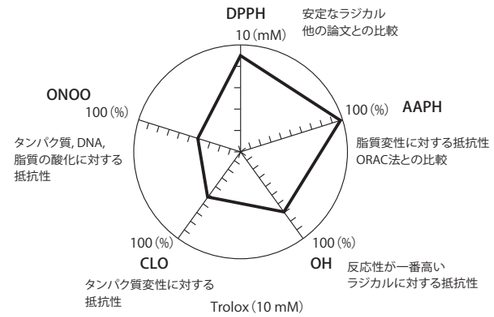
さらに、2013・2014年度は鶏肉を評価。タンパク質の消化により生じるペプチドが抗酸化性を示すという研究報告があったため、世界的にも広く食されている鶏肉に着目しました。その結果、鶏肉の人工胃液消化物から抗酸化性を示すペプチドを発見することが出来ました。

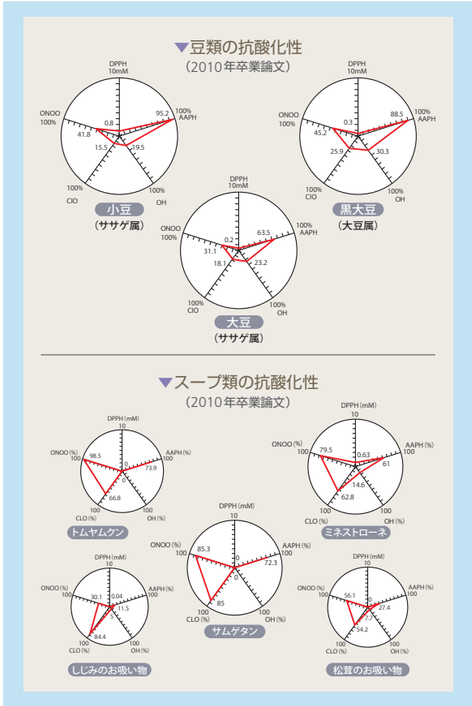
――抗酸化性の強い成分を特定することは、どのような利点に繋がるのでしょう？

私達は、1日の食事で摂取する約2000キロカロリーの熱量を体内でエネルギーに変換するため、500ℓもの酸素を消費しています。その過程で発生するのが活性酸素です。体内には活性酸素に対する消去機構が備わっており、食品に含まれるカテキンやフラボノイド、ビタミンC、Eなどの抗酸化物質も作用するため、そのほとんどは消去され問題はありません。しかし、偏った食事やストレス、喫煙などによって活性酸素が大量に発生すると、消去が追いつかず、体内のタンパク質や脂質などが酸化されて、老化を早めたり生活習慣病を引き起こしたりする可能性が高まると考えられています。抗酸化性が強い成分は、活性酸素を消去する力が強いということであり、その作用を明らかにすることで健康の維持、増進をはかる食生活のあり方を追求していくことが可能となります。

◀抗酸化性ペプチドの分離に用いた高速液体クロマトグラフィー

レーダーチャートを用いた抗酸化性の総合評価





◉新しい抗酸化性評価法「ミオグロビン法」を開発

――抗酸化性評価法の開発、発表もされていますが、これはどのような方法なのですか？

抗酸化性を評価するにあたり、2005年からその評価方法の開発も進めてきました。他の研究者の論文からヒントを得て新しい抗酸化性評価法を開発し、07年に発表（"New method to evaluate water-soluble antioxidant activity based on protein structural change.» Terashima M, Nakatani I, Hirima A, Nakamura S, Shiiba M. *J Agric Food Chem. 2007 Jan 10;55(1):165-9.*）、10年に「ミオグロビン法」として確立させました。

ミオグロビンとは筋細胞に存在し、筋肉でのエネルギー産生をサポートするタンパク質の一種です。ミオグロビン法は、活性酸素がミオグロビンと反応し、ミオグロビンの吸光度を下げる現象を利用して食品成分の抗酸化性を測定します。代表的な活性酸素種として用いるのは、次亜塩素酸イオン（CLO）、ペルオキシラジカル（AAPH）、パーオキシナイトライト（ONOO）、ヒドロキシラジカル（OH）の4種。これらに対する抗酸化性を評価します。標準的なラジカル試薬とされるDPPHに対する抗酸化性とあわせてミオグロビン保護率を算出してレーダーチャートで表します。このわかりやすい評価方法は、今後、様々な形で役にたつのではないかと考えています。

研究は寺嶋教授と大学院生、学部学生が共同して進めている

◉より抗酸化性の強いペプチドの創出に向けて

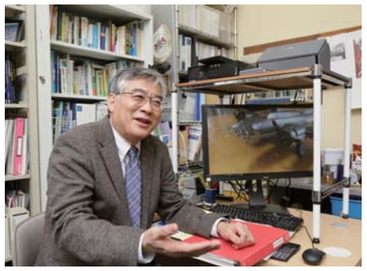
――2016年度はどのような研究を？

16年度の主なテーマは、アミノ酸とペプチドが示す抗酸化性です。個々のアミノ酸の抗酸化性を調べることで、より抗酸化性の高い組み合わせを作ることが出来るのではないかと考え、タンパク質に含まれている遊離アミノ酸20種が前述の4種の活性酸素種（CLO、AAPH、ONOO、OH）に対し、それぞれどのくらいの抗酸化性を示すのかを評価。これにより、アミノ酸の特徴と4種の活性酸素種に対する抗酸化性の関係を明らかにしました。アミノ酸の並びと側鎖の配置を自由に組み合わせ、人工合成ペプチドを作ることは可能です。近い将来、〝スーパー抗酸化性ペプチド〟を作り出せるのではと、今、夢想しているところです（笑）。

また、抗酸化性の強い配列のペプチドを発見することができれば、同じ配列のペプチドを含む食品成分をタンパク質データベースで検索することも可能です。例えば、16年に人工合成したペプチドGYYGは、稲のグロブリンというタンパク質の一部に含まれていることがわかりました。それが別の研究の基礎になったり健康食品等に応用されたりすることが考えられますね。

――今後の展望をお聞かせください。

ひき続き、抗酸化性ペプチドの研究を進める予定であり、今は食品としてそば粉が示す抗酸化性の評価をしているところです。また、野菜の抗酸化性に及ぼす保存期間の影響についても研究を進めています。野菜を加熱調理した際、抗酸化性は変化するのか？ 長く冷蔵庫に入れてしんなりした野菜の抗酸化性は維持されているのか？ 生と乾燥チップスにした場合の違いは？…など、研究したい項目は尽きません。このようなプランニングをしている時が一番楽しく、実験はひたすらコツコツと行い、思い通りにいかないことも多いのが現状です。しかし、研究は地道な積み重ねによる土台がないと次の段階へは進めず、一つ進めるとまた次の課題が見えてくるのです。


寺嶋教授の趣味のひとつはプラモデル作り。
お気に入りのメンフィス・ベル仕様のB17はスクリーンセーバー画像に

研究は地道な積み重ねによる土台がないと次の段階へは進めず、一つ進めるとまた次の課題が見えてくるのです。

■**寺嶋正明**（てらしま・まさあき）
京都大学工学部、同大学院に学ぶ。専攻は生物化学工学。工学博士。1983年より京都大学工学部助手、97年より大阪府立大学工学部講師、助教授を経て、2003年神戸女学院大学人間科学部教授に着任。06年から人間科学部長、09年から12年まで教務部長、13年から14年まで共通英語教育研究センター長、15年から入試部長を務める。研究分野は食品分子機能科学。食品成分の抗酸化性新評価法の開発。鶏肉消化物中のACE阻害ペプチド、抗酸化性ペプチドに関する研究論文を発表している。

一人ひとりの患者が より生きやすくなるために

●精神保健福祉士
渕脇 綾乃 さん―― *FUCHIWAKI Ayano*

統合失調症、うつ病、認知症、摂食障害や不安障害…。複雑化した現代社会において、誰もが罹りうる心の病。精神保健福祉士（PSW）とは、そうした精神障害を抱える人に対し、社会復帰への相談援助を行うソーシャルワーカーのこと。PSWとして神戸大学医学部附属病院の精神科に入職し、患者と家族、医療チーム、地域の施設や医療機関などの連携を図るため、日々奮闘している渕脇綾乃さんに話を聞いた。

勤務する神戸大学医学部附属病院精神科のスタッフたちと

◉〝涙〟も共感を伝える術

「実は、音楽大学を受験するつもりだったんです」。3歳から高校3年生の夏まで、音楽の道を歩んできた渕脇さん。留学も決まっていたが体調を崩して進路変更を余儀なくされ、音楽療法士に興味を持った。当時の担任から「仕事の幅が広がるから、カウンセラーを目指しては?」とアドバイスを受けて勉強していく内に、人を取り巻く環境にアプローチしていくPSWの専門性に面白みを感じ、進む道を決めたという。

神戸女学院大学に在学中、渕脇さんは実習で大きな悩みを抱えた。もともと涙もろい性格がゆえ、患者から辛い体験や頑張った話を聞くと、どうしても泣いてしまうのだ。対人援助の心得とされる『バイスティックの7原則』の中にある「統制された情緒的関与」を「患者様の前では感情をコントロールしなければならない」と意気込みすぎた結果、自分らしさが分からなくなっていた。「泣き虫PSWが居たっていいんじゃない? 喜怒哀楽が分かりやすくて」。相談した水本誠一先生からの言葉で、一気に肩の力が抜けた。後に、患者からも「渕脇さんに泣いてもらったから私も泣けた」、「一緒に泣いてもらってスッとした。私だけが辛いと思い込んでたんじゃなかったんだ」と言われ、「患者様を不安にさせず、状況を客観的に見るもう一人の自分を頭の隅に用意できるのなら、共感を伝える一つの術として泣くことがあってもいい」。先生の言葉をそう解釈し、それが日々の支えになった。

◉〝患者様の応援団〟をつくる

現在、渕脇さんはPSWとして、様々な精神障害を抱える患者へのケースワークを受け持っている。業務内容は患者の生活全般に及び、ライフステージによって必要となる支援も変わるため、終りはない。面談では、患者が困っていることを聞き出し一緒に解決していく。話してくれる内容とは別のところに要因があることも多く、医師をはじめとする院内スタッフ達と密に連絡をとりながら、病気の全体像や人物像、ライフスタイル等を総合的にみていく。また、患者の居住地域との連携を図り、必要な就労支援施設や地域活動支援センター、訪問看護師等を手配し、介護保険サービスや福祉サービスなどの情報案内も行う。患者の家族や知人と連絡をとるだけでなく、患者の家に行き、生活環境を目で確かめることも多い。「親も主治医もキャッチしていない情報を、いきつけの喫茶店のオーナーが気づいて連絡をくれ、病状の変化に対応できたこともあります。あらゆる方面から患者様の情報をキャッチし、チームで共有して次の一手を考えてく。これが大きな分岐点に繋がることもあるんです」。

救えるなんておこがましいことは思っていません。でも、関わることで患者様の人生にプラスとなる〝何か〟を一緒に探すことはできるはずです。

入職当初は、何でも知っていなくてはと焦りがあった。しかし、この仕事は患者を中心に主治医や看護師、作業療法士達とチームで進めていくもの。「どう対応したらよいのか分からない時も、誰かが何かしら答えを持っていたり、導き出したりしてくれる。先輩や患者様から様々なことを教わり、今では知らなくて当たり前、勉強していけばいいと思えるようになりました」。

◉PSWとしてのあり方を模索

渕脇さんが心掛けていることの一つに『これをしておいた方がいいなと思ったら、すぐ実行』というのがある。精神障害は快復までのスパンが長い。数カ月、数年後に「あの時、○○を手配してくれたから死なずに済んだ」と言われることが何度もあり、その度にやっておいてよかったと胸をなで下ろすのだという。

また、『決めつけない』ことも意識している。経験値は大切だが、前にも似たタイプの患者がいたとパターン化してしまうと、重要なサインを見逃してしまう。「同じ病気でも違う症状が出ることもあり、病気の影響で思考がまとまらなかったり、自己表現し難かったりする方もいます。新規の患者様と接する際は、個別性を見るよう気を引き締めないと」。

◉その人の持つ〝力〟を育て応援する

「自分のことを奈落に突き落としたのは人間だけど、そこから救ってくれたのも人間だった」。学生時代、アルバイト先の就労支援事業所で出会った利用者が発したこの言葉を、渕脇さんはずっと大切にしている。「人を立ち直らせるのは、その人自身の中にあるもの。PSWがいなくても人は生きていけるし、救えるなんておこがましいことは思っていません。でも、関わることで患者様の人生にプラスとなる〝何か〟を一緒に探すことはできるはずです」。幻聴や幻覚に苦しみ、死を口にする患者もいる。たとえその人が本当に人生を終わらせたいのだとしても、自分を必要としてくれる居場所、役に立てることがあると知れば、変わる結果もあると渕脇さんは言う。また、混沌とした精神病の世界から抜け出すことができれば、やはり生きたいと思うかもしれないとも――。「PSWの業務内容は多岐に渡りますが〝社会での居場所や役割を見つけるお手伝いをし、より生きやすくなるよう働きかける〟ことを目指している点は、全てにおいて共通しています。私の役目は、患者様の中に埋まっている種に水をやり続け、芽が出ろ～と声をかけたり、時々休ませたりしながら育ちを見守ること。それによって少しでも楽になってもらえれば。何年後、何十年後かもしれないけれど、その芽が育って花が咲いたら、私のことは忘れていても全然構わないんです」。患者自身が生きる意味と居場所を見い出し、生きてくれる。それこそが、渕脇さんのやりがいに繋がっている。

■**渕脇綾乃**（ふちわき・あやの）
2012年 人間科学部 心理・行動科学科卒業。在学中に精神保健福祉士養成課程を経て国家資格を取得。医療法人貴生会 和泉中央病院を経て、2014年8月より神戸大学医学部附属病院の精神科に入職。精神障害者のケースワークを担当。

K.C.Alumni

Psychiatric Social Worker

◉クローバーゼミ開設記念

多角的な視点を持ち、自ら学びを深める新スタイルのゼミ

クローバーゼミ

アクティブ・ラーニングの手法を用いた参加型授業

■<人文科学担当>：文学部 総合文化学科
高橋 雅人（まさひと） 教授

■<社会科学担当>：人間科学部 心理・行動科学科
小林 知博（ちひろ） 教授

■<自然科学担当>：人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
高岡 素子 教授

神戸女学院大学では、2017年度からの新カリキュラム導入に伴い、1年生後期に（音楽学科は2年生後期）「クローバーゼミ」を開講する。1年生必修であるこのゼミは、人文科学、社会科学、自然科学の3領域の教員がチームとなって授業を進め、学部学科を横断して集まった学生と共同で学びを深めていくというもの。開講に先駆け、2016年度は「鯨」をテーマに計14回のトライアルゼミを実施。対象は1年生後期の希望者で、定員を上回る36人の応募があった。この初となる試みに、先陣を切ってチームを組み、指導にあたった高橋先生、小林先生、高岡先生に話を聞いた。

―クローバーゼミ開設の背景をお聞かせください

高橋先生　日本の18歳人口は2018年頃から急激に減少し、大学への進学者数にも大きな影響を与えると予想されています。その対策として本学は、2014年に「2018年問題検討ワーキンググループ」を設立し、時代に即したカリキュラムの構築を検討してきました。そして、本学の魅力であるリベラルアーツ教育をより体系化し、学生の主体的な学びを喚起しようと、このゼミを発案しました。

小林先生　新ゼミでは人文・社会・自然の3領域の教員と3学科の学生が集まって、様々な視点に気づく授業を展開します。私達は学生に、幅広い知識と、異なる意見を受け入れられる柔軟性、他者とコミュニケーションできる対話力、どんなメンバーとでもやっていける適応力…といった「人間力」を備えて欲しいと願っており、そうした力を養う内容です。

高岡先生　全学科必修のゼミであり、教員にとっても初の経験となるため、私達3人でトライアルゼミを実施することにしました。授業は各教員が4回ずつ担当。3人の教員はともに全授業にも立ち会って、情報共有しながら進めました。

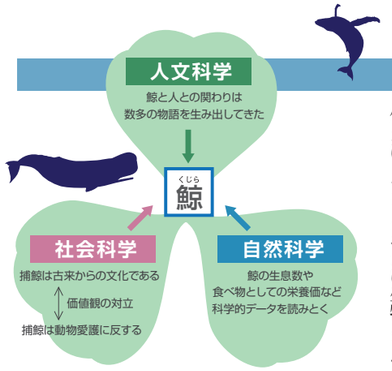
―「鯨」をテーマに、どのような内容を展開されたのですか？

小林　まず、社会科学の分野からは学びの目標を、集団による物の考え方の違いを知ること、人前でどちらの立場からも論理的に話ができるようになることの2つとしました。西洋の見解として海外の動物愛護団体から抗議運動を受けた和歌山県太地町の捕鯨に関する映画を、日本の見解として漁師の視点で捕鯨を扱ったNHKスペシャル番組を観賞。新聞・雑誌記事も参照の上、賛成と反対のグループに分けてディベートを行いました。

高岡　次に、自然科学からのアプローチということで、生物としての鯨を扱いました。「鯨はどうやってコミュニケーションを取っているのか？」など、自由に問いを立ててもらい、それらを全て付箋に書いて貼り付け、カテゴリ分けして、ディスカッション。グループディスカッションでは話せない学生も、この方法なら必ず話す機会があるため、参加意識が高まるのです。その後、班で優先順位の高かったテーマについて、各自で調べてレポートを作成。鯨に関する実験を計画し、プレゼンテーションを行いました。

高橋　最後に、人文科学の分野から。まず、3種の百科事典から鯨に関する記事を拾い、読み比べを行いました。例えば、ブリタニカは生物としての内容が多く、日本の事典は文化に関する記述が多い。そこに気づいた上で、さらに様々な立場からの視点を養うために、世界各地の捕鯨や捕鯨文化の歴史と現状を学際的に検討した論文集より数編を読んで、グループディスカッション。自分は鯨のどこに興味があるのかに気づき、それを図書館で調べ、レポートを作成してもらいました。

▲写真：左から高岡教授、高橋教授、小林教授



専門を越えた学びのカタチ
<クローバーゼミ>

―手応えはいかがでしたか？

高橋　学生への事前アンケートでは、人前で話せるようになりたい、ディスカッションやプレゼンができるようになりたい…と、自分に不足しているところを伸ばし学びたいという意欲が感じられました。事後アンケートを見ると、それらに対する達成感は高かったようです。

小林　全14回の授業を通して、プレゼン、ディベート、レポートの3種類を経験できたのがよかったようですね。同じ題材でも学問分野によってアプローチが違い、同じ学生同士でも考え方が違う。様々な視点に気づくと同時に、調べる力もついたと思います。

高岡　これまで、学生は与えられて勉強してきています。そのため、正解や正解への道筋を教えて欲しいと求めてくる傾向があると感じました。でも、クローバーゼミではなるべく教員は介入しません。大学は自分が面白いと思うことを自主的に学ぶ場所。それが学修だと気づいて欲しいですね。

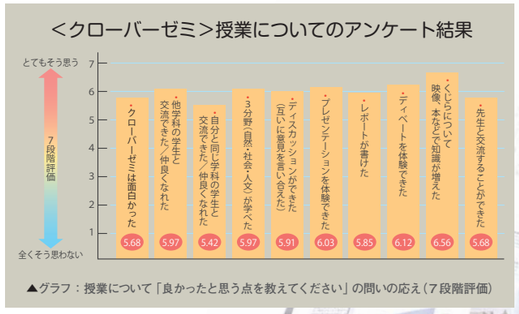
―トライアルを生かしての2017年度。教員側には何が求められるでしょう？

高橋　2017年度は、9つのチームがそれぞれ異なるテーマを設定します。ゼミの中で、学生の自主的な学びをいかにうまく引き出すか。引き出す授業は、学生がどのように伸びていくのか読めないので大変です。しかし、教員は学生のポテンシャルをこんなものだと決めつけず、もっと信じてよいと思います。

高岡　これまで自然科学の分野は座学が多く、実験も手順が決まっているものを与えることが殆どでした。これからは与えるのではなく、学生の興味や自主性を引き出すことが教員の役割。学生と教員の意識改革が必要ですね。

小林　学生達は社会に出たら様々な判断を求められ、正解は必ずしも1つではありません。その中で大学はどういう教育をすべきか。知識を入れるだけならインターネット授業でもよいでしょうが、同世代の学生が集まって意見を言い合ったり、切磋琢磨してプロジェクトを完成させたりするなど、相互作用によって多様な状況への適応力が身につく。大学で学ぶ最大の魅力はそこにあると思うので、教員側もそれを意識した授業作りが必要になると思います。

高橋　また、このゼミは教員同士のコミュニケーションがとても大切です。チームでどのように情報共有をするのか考えていかねばならず、他の教員がどんな授業をしているのかを知ることも必要です。教員にとっても勉強になり、多くの気づきを得られると思います。



▲グラフ：授業について「良かったと思う点を教えてください」の問いの応え（7段階評価）

―学生へのメッセージをお願いします

小林　学生にはこのゼミを受けることで、他領域を学ぶ楽しさ、他者との意見の違いとそれを共有し、自ら判断する楽しさに気づいて、より充実した大学生活を送って欲しいですね。そこで培った力は、卒業後も社会で生き抜くために役立つ「一生の道具」です。本学での学びをきっかけに、道具の数を増やしながら、よりよい人生を送って欲しいと願っています。

Field Study to Poland

POLAND

●英文学科へフィールドスタディ〉：ポーランド共和国

「戦争と平和」ポーランドの歴史と文化から現在を学ぶ

フィールドスタディ テーマ：
戦争と平和を通してポーランドの歴史と文化からのヨーロッパの難民と移住危機の理解

神戸女学院大学英文学科の夏期フィールドスタディが開催され、2016年8月1日から14日の日程でポーランドを訪れた。研修の目的は、「現在の難民と移住の危機をヨーロッパで理解する」こと。
ポーランドは、旧ソビエト連邦（現ロシア）とドイツの間に位置する大きな国だが、中央ヨーロッパという位置関係から歴史的に幾度も隣国の支配を受け、国土の分割、消滅、復活を繰り返す数奇な運命をたどった。1939年9月にはナチスドイツ軍のポーランド侵攻によって第二次世界大戦が勃発し、甚大な人的被害、建物被害を受けたが、不屈の精神で国家復興を成し遂げてきた。
今回の海外フィールドスタディのコースは、英文学科のYolanda Alfaro TSUDA教授とポーランド出身のMonika KSIENIEWICZ客員講師が指導、引率し、12名の学生が参加。参加学生たちは、出発前の事前講義、勉強会を経てフィールドスタディに臨んだ。現地では、移民博物館の視察やレクチャーに参加し、ポーランドが移民や難民の問題にどう取り組んできたのかを学んできた。また、ホロコースト関連施設の見学や、現地大学での特別講義の聴講などが実施され、ポーランドのメディアにも取り上げられるなど、多くの貴重な体験を得た14日間となった。
参加学生12名のコメントを紹介する。（次ページ：P15-16）

■ 2016 Field Study to Poland (Aug 1st-14th, 2016)
▼Aug.1st (Mon.) / TRAVELED FROM JAPAN TO POLAND▼Aug.2nd (Tues.) / WARSAW▼Aug.3rd (Weds.) / WARSAW TO LODZ▼Aug.4th (Thurs.) / WARSAW TO POLIN▼Aug.5th (Fri.) / WARSAW TO GDANSK▼Aug.6th (Sat.) / GDANSK▼Aug.7th (Sun.) / GDANSK▼Aug.8th (Mon.) / GDANSK TO OPOLE via Warsaw▼Aug.9th (Tues.) / OPOLE▼Aug.10th (Wed.) / OPOLE TO KRAKOW▼Aug.11th (Thurs.) / KRAKOW TO AUSCHWITZ AND BIRKENAU, GERMAN NAZI CONCENTRATION CAMP▼Aug.12th (Fri.) / KRAKOW▼Aug. 13th ~ 14th（Sat.and Sun.) / TRAVELED FROM WARSAW BACK TO JAPAN

◉NHK BSプレミアム「美の壷」：<心のふるさと 学び舎>でも紹介

ツアー・マイスター

国の重要文化財建築を案内して魅力再発見！

昭和8年に岡田山へ移転新築された神戸女学院のキャンパスは、ウィリアム・メレル・ヴォーリズによって設計されたもの。そのうち12棟が2014年9月、国の重要文化財に指定された。これを機に、学生が一般公開日などで建物の特徴や見どころを説明する「ツアー・マイスター」がスタート。6人の学生にやりがいなどを聞いた。

松川 さん　川村 さん　重松 さん
西山 さん　清水 さん　西村 さん

▼ツアー・マイスター養成講座で母校を知る

クリーム色の外壁に瓦を葺いたスパニッシュ・ミッション様式が美しい岡田山キャンパス。中庭を囲むように四方に建てられた建物はリベラルアーツ教育の精神を表し、アカデミックな雰囲気を醸し出している。

ツアー・マイスター養成講座、2016年度は三期生46名が新たに認定を受けた。一般公開日や西宮市のまち歩きイベントなどでガイドを務める中で、学生たちはより深く母校を知り、愛着を深めてゆく。2017年度からは、自校教育の一環としてプロジェクト科目が開設され、単位を取ることもできるようになる。

▼自作のガイドブックを作成

案内時はメイン1人とサブ2人でチームを組む。ガイドとしてデビューした当初は配布したマニュアルを読んでいるが、慣れてくると自前の台本を作成する学生も多い。それぞれの個性を生かしたユニークな説明が来場者にも好評だ。クイズ形式にしたり、ある学生は環境分野の知識を生かして岡田山の生物の話を盛り込んだり、写真部の学生は撮影スポットを教えるといった具合だ。

来場者は、卒業生、建築関係者をはじめ全国各地から集まっている。卒業生とのやり取りでは当時の思い出話が飛び交い、マイスターにとっても楽しいひとときだ。

ツアー・マイスターそれぞれの個性を生かした自作のマニュアル

マイスターとして活動しなくとも、養成講座を受講するだけで大学のことがよくわかり、得られるものは多いという。大学院生の松川さんは「以前は古いものを新しくしようという考え方でしたが、今ではいかに大切に守っていくかに重点を置くようになりました。これからもたくさんの人たちに大学のよさを伝えていきたい」と話す。

▼ヴォーリズ建築の魅力

ヴォーリズ建築の特徴は大きく三つ。実用的な設計、緑豊かな周辺景観との調和、その土地を生かした活用だ。例えば床と壁の境目は直角ではなく、ほこりがたまりにくい曲線形状。電線はすべて建物の下に入れて地中化を先取りし、音楽館は背後の斜面が自然の防音壁となっている。上りやすい高さの階段や開け閉めしやすい吊り戸など、至るところに女子学生への配慮がうかがえる。「ヴォーリズさんの思いやりに感動して、大学への愛着が強くなりました」とマイスターの一人。

▼NHK「美の壷」取材で学生がガイド

3月10日（金）のNHK BSプレミアム「美の壷」で、ヴォーリズ建築の校舎が取り上げられた。ツアー・マイスターの学生たちが案内役を務めるというスタイルで撮影が行われ、6名の学生が登場した。緊張しながらも楽しく撮影に臨むことができ、学生たちにとっては貴重な経験となった。

番組ホームページを見た卒業生らは、放送前からSNSで話題にし、放送後も卒業生を中心に数々の反響があり、本学公式Facebookページのテレビ取材記事には多くの「いいね！」がついた。

まさしく「環境が人を育てる」の実践教育がここにもあった。

◀「美の壷」撮影時の様子

Field Study to Poland

◉ 英文学科 フィールドスタディ レポート

ポーランドの歴史と文化 現地体験レポート

No Photo

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生
小林 さん

私は英文学科所属ではありませんが、学科の壁を乗り越えてチャレンジしたいと思い、参加をしました。また、魅力的なプログラム内容も参加理由の一つです。蜂起博物館で90歳のホロコースト生存者の方にお会いできたことが、最も印象に残りました。極限状態の中、人間としての尊厳を保つために行動されたエピソードをうかがい、自分ならそのようなことができるのだろうか？ と深く考えさせられました。その方に握手をしていただいたことは、とても大切な思い出です。お会いすることができて、本当によかったです。

No Photo

●文学部 総合文化学科 3年生
伊藤 さん

将来は社会科の教員を目指しています。机上で学ぶだけではなく、実際に現地を訪れて移民や戦争の歴史について学べるプログラムに強く関心を持ったので、参加をしました。家族からワルシャワは世界一きれいな街だと聞いていましたが、本当にその通りの美しい町並みで感動しました。グダンスクでは、ポーランド民主化を先導した「連帯運動」と、それを支えた日本人の存在を初めて知りました。人の記憶は薄れてしまうものだと思いますが、次代に繋げていくために、教員となって今回経験したことを生徒たちに伝えていきたいです。

No Photo

●文学部 英文学科 3年生
大寶（おおたから） さん

第二次世界大戦後の社会主義体制や過去には国家が消滅するなど、激動の歴史を辿ってきたポーランド。日本とは異なる歴史が、文化や人にどのような影響を与えたのかを体感したいと思い、参加を決めました。以前からアウシュビッツ強制収容所を訪れたいと思っていましたが、実際に大量虐殺の跡を目の当たりにすると、同じ人間に対してこんなに残虐なことができるのかと、現実感を持つことができませんでした。同時に「皆でやれば怖くない」という言葉を思い出し、強制収容所での出来事もその理論で起こったのではないかと感じました。

No Photo

●文学部 英文学科 3年生
永禮（ながれ） さん

私は移民問題に関心があるため、今回のフィールドスタディに参加しました。
ワルシャワの旧市街では、一度戦争ですべてなくなった後、市民が再建した街が世界遺産になったということに驚きました。
ミュージアム見学や現地大学生とのワークショップなど、貴重な経験をすることができました。特に強く印象に残ったことはアウシュビッツ強制収容所を訪れたことですが、ホームステイで暖かく受け入れていただいたことも印象的でした。ネットでは知ることができない多くの学びを体感できたので、今後に生かしていきたいと思います。

No Photo

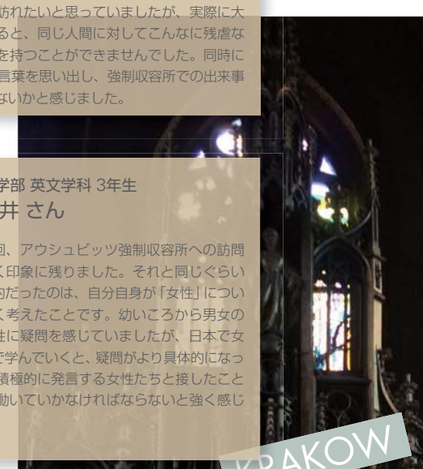
●文学部 英文学科 3年生
飯盛（いさかい） さん

ワルシャワ旧市街の美しい街並や移民博物館でのレクチャー、強制収容所への訪問など、教科書や写真を見るだけでは分からなかったことを知る機会となったフィールドワークでした。地元メディアのインタビュー取材を受けた際に日本について様々な質問をされましたが、うまく答えることができず、いかに自分が日本のことを知らないのかを痛感しました。それに対してポーランドの人々は自国についてしっかりと答えられていました。他国のことを知るためには、まず自分自身がしっかりと自分の国を知る必要があるのだと認識しました。

No Photo

●文学部 英文学科 3年生
中井 さん

今回、アウシュビッツ強制収容所への訪問が強く印象に残りました。それと同じぐらい印象的だったのは、自分自身が「女性」について深く考えたことです。幼いころから男女の平等性に疑問を感じていましたが、日本で女性が置かれている状況を大学で学んでいくと、疑問がより具体的になっていきました。ポーランドで積極的に発言する女性たちと接したことで、女性も意見を持ち、自ら動いていかなければならないと強く感じました。



No Photo

●文学部 総合文化学科 2年生
寺田 さん

複数訪れたミュージアムの中で、ノーベル物理学賞受賞者・キュリー夫人の博物館が印象に残っています。見学をして、ポーランドでは昔から女性が活躍しているのだと感じました。また、在ポーランド日本大使館の方のお話を聞く機会があり、『ポーランド人の穏やかで優しい人柄が、日本人とよく似ている』と話されたことも印象的でした。滞在中はホームステイ先のホストファミリーに、大変優しく受け入れていただきました。ぜひまたポーランドに訪れたいと思っています。

No Photo

●文学部 総合文化学科 3年生
堺 さん

アウシュビッツをテーマに卒論を書こうと考えているので、現地で学べる機会だと思い参加しました。博物館となっているラデガスト鉄道駅（強制収容所へ人々を移送した駅）では、実際に当時使われていた車両に乗り、窓もない狭い空間に多くの人が詰め込まれていたことを思うと何とも言えない気持ちになりました。また、アウシュビッツ強制収容所を訪問して、人々の無念を知ることができました。フィールドスタディに参加したことで卒論に具体性が出たので、今回の学びをしっかり生かしたいと思います。

No Photo

●文学部 英文学科 2年生
石川 さん

私は演劇活動をしています。高校生の時、戦争と地震をテーマにした芝居を演じる機会がありましたが、戦争とは実際にどういうものなのかということを一切知らず、漠然と「怖い」と感じているだけでした。フィールドスタディに参加し、ポーランドでの講義や強制収容所を訪れたことで、戦争がいかに悲惨で怖いものであるのかを実感することができました。今後、今回の学びで得たものを、演劇を通じて皆さんに伝えていきたいと思っています。

No Photo

●文学部 英文学科 2年生
竹山 さん

移民問題について授業で学び、興味を持ったため、移民の行き来が盛んなポーランドでのフィールドスタディに参加したのですが、実際に訪れてみると自分は何も知らないのだと気づかされました。シンドラー博物館やアウシュビッツ強制収容所など、そこへ行かなければ分からない、感じられないことを経験できました。今後、さらに勉強をして再訪したいと考えています。また、英語力に自信がなかったのですが、積極的に交流しようという姿勢で臨みました。この姿勢は今後も生かしていきたいです。

No Photo

●文学部 英文学科 3年生
辻 さん

小学生の頃に「アンネの日記」を読み、ポーランドやアウシュビッツを知って、いつか訪れてみたいと思っていました。現地、オポーレ大学でのポーランド移住に関する講義では、ヨーロッパは長い歴史の中で国境線が頻繁に変わり、それが文化形成に対して大きく影響するということを学びました。日本のように国境線のない国では考えもしないことでした。ワークショップで出身地の異なる学生と共に取り組むことで、考えをまとめるスピードや積極的に発言する姿勢など日本人との違いを感じ、学ぶことが多くありました。

No Photo

●文学部 英文学科 3年生
真鍋 さん

第二次世界大戦で壊滅的に破壊された後、ポーランド人自身の手によって忠実に再建されたワルシャワ旧市街は、他の世界遺産とは異なる独特の雰囲気を感じました。ホロコースト生存者にうかがったお話では、人間の尊厳を保つことを優先するため、配給されたスプーンなしの食事を拒否したエピソードが心に残りました。全ての人間は弱さを持っていますが、意志を持つと人は強くなれるのだと思いました。

阿蘇大橋崩壊現場

Volunteer at Kumamoto

熊本地震、被災地でボランティア
日常が壊れた現場を目の当たりにする

2016年4月14日以降、熊本県と大分県で相次いで大地震が発生した。山崎さんは、9月16日から19日にかけて、地震で被災した熊本でのボランティアに参加。「常に状況の変わる被災地では、臨機応変になんでもやろうとする気持ちが大切です」と語る。

•文学部 英文学科2年生
山崎 さん

倒壊した家屋

田んぼでの稗刈り

線路が草で被われて見えない

鉄道の草抜き作業

▲田んぼのヒエ刈りや雑草取りを体験

パーキンソン病になった祖母を手助けするようになったことをきっかけに、ボランティアに興味を持ちました。熊本では当初、物資の仕分けをする予定でしたが、現地の団体との調整の結果、南阿蘇村で稲のヒエ刈りと鉄道の雑草取りをすることになりました。

作業は2日間で、1日目はヒエ刈りでした。ヒエはイネ科の一種で、最初は稲と見分けるためにひと苦労しました。虫の卵も我慢しなくてはならず、災害ボランティアは何でも嫌がらずにやる人が向いていると感じました。がれきの撤去や泥のかき出し作業をイメージしがちですが、普段できていることができなくなり、そのために人手が必要になるのが被災地なんだと、実感しました。

2日目は南阿蘇鉄道の線路の雑草取りをしました。震災直後から運転休止をしていたのですが、復興ウォーキングイベントに備えての作業でした。お昼休憩の時点で、任された範囲の半分も終わらずにいましたが、参加者全員が、作業時間を延長してやり抜くという意見で一致。作業の終了直前は雑草の最後の1本をリーダーが抜くのを見て、自然と拍手が起きました。

▲活動の継続で熊本を支えたい

その後は南阿蘇村をバスで回りました。一見壊れてなさそうな家でも人の気配がなく、ほとんどの住人は違う場所にいるようでした。しかし、仮設住宅周辺にはスーパーがなく、生活は不便そうに感じました。阿蘇大橋を訪れた際には、鉄筋で頑丈に造られた橋が崩壊した姿を見て、人間にはどうしようもない自然の脅威を感じました。

現地で交通整備やがれき撤去などのボランティアを続けている方の言葉が印象に残っています。「完全な復旧までにあと年～10年はかかります。就職された後でも間に合うのでまた、ぜひ戻ってきてください」。行く前は復興が進んでいるのではないかと考えていた私には衝撃的でした。

ボランティアというのは、人に何かをしてあげているようで、活動する側もたくさん得るものがあります。今回のボランティア活動では、参加者同士の交流が深まっただけでなく、近くの温泉で高齢の方から熊本の歴史を聞いたり、地元の方の手料理を食べたりして、熊本のよさを知りました。多くの人との出会いは貴重です。誰かの助けを必要としている人々はたくさんいると思うので、今後も活動を続けたいと考えています。

◎1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」：奨励賞 受賞

「防災ウォッチ」：地域創りリーダー養成プログラムが評価！

神戸女学院大学が副専攻の「地域創りリーダー養成プログラム」で取り組んできた「防災ウォッチ」の活動が、平成28年度『1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」』で奨励賞を受賞した。これは、兵庫県、毎日新聞社などが主催し、「防災教育」にかかる先進的な活動を顕彰するもの。全国各地から136校・団体が応募。その中から、44校・団体が受賞した。

本学の「防災ウォッチ」は、「楽しみながら防災を」というテーマで行った子ども向けの防災啓発活動である。災害時に危険となるものや身を守ってくれるものを“妖怪”に見立て、30種類以上のオリジナルキャラクターを作成。街や家の中で実際に“妖怪”を探すという、ゲーム感覚で防災を学べる取り組みが評価された。

Industry-university-government collaboration
にしのみにゃ部™

◉産学官連携への取り組み

◎フェリシモ×◎西宮市の企業×◎学生のコラボレーション

自由な発想による商品開発で、地域の活性化に貢献

昨年度より西宮市が新たに開始した「産学官連携による西宮ブランド産品創造事業」の一環として、株式会社フェリシモが市内の学生や企業と共に「にしのみにゃ部」を発足し、猫をキーワードとする商品開発を行った。参加した12人の学生のうち、5人は女学院生。昨年6月から商品企画や販売促進・販売のための媒体制作などについてのセミナーを受け、商品の開発に臨んだ。開発化された8商品は、10月7日より「フェリシモ猫部」阪急西宮ガーデンズ店（常設店）で販売中。10月20日までは魅力発信ブース「にしのみ屋」（阪急西宮北口駅構内）でも販売された。このプロジェクトに参加した平岡さんに、活動内容や商品販売の手応え等について話を聞いた。

●人間科学部
環境・バイオサイエンス学科
3年生
平岡 さん

にしのみにゃ部×素直にあやまれソーダの会
（4本セット）1454円

にしのみにゃ部×桜咲くにゃんこサイダーの会
（4本入り）1454円

にしのみにゃ部×YOU+MORE！
ネコスプレ！レアチーズケーキの会
（6個入り）1778円

―プロジェクト参加のきっかけは？

副専攻の「地域創りリーダー養成プログラム」の授業で地域活性化や産学官連携について学び、「大学生の私でも、何か地域に貢献できるのでは？」と考えていたところ、学内の掲示板にこのプロジェクトのことが。即決で応募しました。

―どのように開発を進めたのですか？

セミナーは計10回。西宮市の企業の方々も交え、ブランディングについてのレクチャーを受けました。初回から、クッキーやソーダ等、5商品のアイデアを2週間後に出すよう言われ、それが一番難しかったです。でも、商品を手に取るとき、私の場合は機能性だけでなく可愛さや個性に魅かれると気付き、そこからアイデアを出していきました。

―どのようなアイデアが採用に？

私のアイデアが直接形になったのは、「桜咲くにゃんこサイダーの会」。地域猫は花びらの形に耳がカットされていることから、「さくらねこ」と呼ばれていることを知り、商品になれば多くの人に知ってもらえることから、桜フレーバーを選びました。

また、アイデアをまとめる際、企画案を壁に貼り、皆でよいと思う点を付箋に書いて貼っていったのですが、「猫のごめん寝ポーズ（両足を前に揃え、顔を埋めて寝ている姿）でソーダを作りたい」というアイデアに、私が「素直にあやまれソーダな！」と書いたところ、それが商品名になりました。私のしょうもないつぶやきが大きなものに変わった。とても面白い経験であり、新しい発見でした。

にしのみにゃ部×甘えんぼう猫酒＜甘酒＞（6本入り）1831円

あとは、商品に占いをつけたいという希望も叶い、甘酒に採用されました。

―それらを販売する常設店のオープン等にも携わったそうですね。

はい。「フェリシモ猫部」※フォロワーの皆さんと一緒にお店の什器作りをしたり、商品の撮影会に参加したりと盛りだくさんでした。『ネコスプレ！レアチーズケーキ』は、フタに猫の口元が描かれ、猫になってSNSにアップできるので、撮影会では皆で猫に変身したんですよ。

―商品の反響はいかがでしたか？

オープン日の朝に行ったら、既に猫部ファンのお客様でいっぱいでした。絵柄の違うソーダを全種類買って下さる人もいて、第三者の目から見ても可愛いんだと嬉しくなりました。1カ月後の販売状況では、レアチーズケーキや甘酒がかなり上位の方にランクイン。東京など全国各地で期間限定ショップを出す話もあり、どんどん規模が広がっていくことに驚いています。

―今後の抱負を聞かせてください。

今回、たくさんの人からサポートを受けながら、自分の自由な発想が生かされた商品作りができました。今後も自分の考えを制限せず、人に楽しんでもらえるモノ作りをしたい―。ちょうど就職活動も始まり、進路を考えるよいきっかけになりました。

にしのみにゃ部
ジャムねこブルーベリーとしっぽスプーンセットの会
（1個）1379円

※フェリシモの猫好きが集まるWEBコミュニティー

KC INFORMATION

講演会・公開講座・コンサートなど

音楽学部演奏会・公演

●ベガにオーケストラがやってきた！ Vol.8（サマーコンサート）
日　時：6月27日（火）18:30開演
場　所：宝塚ベガ・ホール
参加費用：前売り500円　当日600円

●オータムコンサート
日　時：10月12日（木）18:30開演予定
場　所：宝塚ベガ・ホール

問い合わせ：音楽学部事務室　TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551　E-mail：music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

●子どものための七夕コンサート 第47回 ～みんなで奏でる愛のハーモニー～
日　時：7月1日（土）
第1部 11:00～12:00（10：30開場）年齢制限なし
第2部 15:00～16:00（14：30開場）小学生以上対象
場　所：神戸女学院講堂
出　演：「音楽によるアウトリーチ」履修生
参加費用：大人500円、子ども（19歳以下）300円　申込み要

●子どものためのスペシャル・コンサート 第48回 ～指揮者ってなぁに？～
日　時：10月28日（土）11:00開演（10:30開場）3歳以上対象
場　所：神戸女学院講堂
出　演：松浦 修（指揮者、神戸女学院大学音楽学部専任講師）ほか
参加費用：大人1,000円、子ども（3歳～19歳以下）500円　申込み要

問い合わせ：音楽学部アウトリーチ・センター
TEL 0798-51-8584　FAX 0798-51-8551
E-mail：concertfch@mail.kobe-c.ac.jp

心理相談室ウィーク

●無料相談（要予約）
日　時：7月31日（月）～8月4日（金）10:00～17:00（土日除く）
場　所：神戸女学院大学心理相談室
申込期間：7月3日（月）～7月14日（金）10:00～18:00（土日除く）
※在学中の方及びその保護者の方のお申し込みは
受け付けることができませんのでご了承ください。

●講演会（予約不要）
演　題：親と子のメンタライゼーション～関係がこじれる前にできること～
日　時：8月2日（水）13:00～15:00
場　所：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館2階201室
講　師：石谷真一（神戸女学院大学大学院人間科学研究科教授）

問い合わせ：神戸女学院大学大学院心理相談室　TEL 0798-51-8554

金曜公開プログラム

●研究所主催講演会
日　時：6月23日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂

●オルガンコンサート
日　時：6月30日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
出　演：片桐聖子、前田直子

●ボランティア推進講演会
日　時：7月21日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂

●礼拝・講演会
日　時：7月28日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
出　演：未定

●礼拝
日　時：9月22日（金）10:35～11:25
場　所：ソールチャペル
説　教：大学チャプレン 中野敬一

●派遣留学報告会
日　時：10月6日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
主　催：国際交流センター

●卒業生演奏会
日　時：10月13日（金）10:35～11:25
場　所：神戸女学院講堂
主　催：宗教活動委員会／音楽学科

問い合わせ：チャプレン室　TEL 0798-51-8502

•「Vistas」アンケートのお願い•

神戸女学院大学広報誌「Vistas」をご覧いただきありがとうございました。
P.17～18にアンケートハガキがございますので、皆様からのご意見・ご要望等をお寄せください。

—※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。—

高校生等参加イベント

●オープンキャンパス
日　時：6月18日（日）、7月29日（土）、7月30日（日）、8月6日（日）、9月18日（月・祝）10:00～15:00
内　容：模擬講義、キャンパスツアー、各種相談コーナー他

問い合わせ：入学センター　TEL 0798-51-8543

●第8回絵本翻訳コンクール
参加申込締切：8月3日（木）
※申込後、課題図書をお送りします。詳しくは本学ホームページをご覧ください。

問い合わせ：学長室（広報）　TEL 0798-51-8585

●音楽学部夏期講習会（要申込み、詳細は音楽学部ホームページをご確認ください）
日　時：器楽、声楽、ミュージック・クリエイション専攻
7月29日（土）～8月1日（火）（※受講資格：中学生・高校生）
舞踊専攻
7月29日（土）、7月30日（日）
（※受講資格：中学3年生以上、高校3年生優先30名まで）

問い合わせ・申し込み：音楽学部事務室
TEL 0798-51-8550　FAX 0798-51-8551
E-mail：music@mail.kobe-c.ac.jp

●理学館体験
日　時：第1回 6月18日（日）／第2回 8月6日（日）／第3回 9月18日（月・祝）
場　所：理学館 S-24教室
参加費用：無料・申込不要（対象：高校生・予備校生等の女子、保護者、教員）

●第12回 高等学校教員対象 環境・バイオサイエンス実験講座
日　時：7月29日（土）
場　所：理学館またはホルブルック記念館
参加費用：無料・申込み要（対象：高等学校・中学校の理科担当教員）

●サイエンス体験
日　時：第1回 8月5日（土）／第2回 8月26日（土）
場　所：理学館またはホルブルック記念館
参加費用：無料・申込み要（対象：高校生・予備校生等の女子、保護者、教員）

●マイクロスケール実験で水溶液の性質を調べよう
※平成29年度「ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI」（研究成果の社会還元・普及事業）採択プログラム
日　時：9月2日（土）
場　所：理学館
参加費用：無料・申込み要（対象：小学校5・6年生）

問い合わせ：人間科学部事務室
TEL 0798-51-8553　FAX 0798-51-8560
E-mail：taiken@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

2017めぐみ公開講座

●2016 めぐみ講演会
「感性を科学する —心理学・脳科学・アートを融合した価値創造—」
日　時：7月13日（木）13:30～15:00
講　師：関西学院大学理工学部教授　長田典子 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：1,000円（学生は無料）　※要予約（HPも可）

「ファンタジーのひと時」
岡田 将・ザビエル ラックによるジョイントコンサート
日　時：10月14日（土）13:30～15:00
講　師：神戸女学院大学音楽学部准教授（ピアノ）　岡田 将 氏
神戸女学院大学音楽学部専任講師（フルート）　Xavier Luck 氏
会　場：神戸女学院講堂
受講料：一般1,500円　学生1,000円　※要予約（HPも可）

●2017アートセミナー
「地中海岸の世界遺産都市を訪ねる（全2回）」
第1回 6月23日（金）13:00～14:30
教会歩きで探るバルセロナ：ロマネスク、ゴシックとガウディの時代
第2回 7月7日（金）13:00～14:30
南仏の中世都市アヴィニョンの歴史と美術
講　師：大阪大学大学院文学研究科教授、神戸女学院大学文学部非常勤講師
岡田裕成 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円（学生は無料）　※要予約（HPも可）

「古典倶楽部 ～テーマに沿って高校の教科書を読み直す～（全3回）」
第1回 9月29日（金）13:00～14:30　テーマ：「月」
第2回 10月27日（金）13:00～14:30　テーマ：「秋の生き物」
第3回 11月24日（金）13:00～14:30　テーマ：「紅葉」
講　師：神戸女学院中高部非常勤講師　錦田靖子 氏
会　場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円（学生は無料）　※要予約（HPも可）

問い合わせ・申し込み：公益社団法人神戸女学院めぐみ会
TEL 0798-51-3545　URL：http://www.megumikai.or.jp/

● 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1／E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
● 表紙解説：心理・行動科学科を2012年に卒業した渕脇綾乃さん。現在、精神保健福祉士として活躍している。（本編に記事掲載）

●神戸女学院大学広報委員会　〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1
●E-mail　kckoho@mail.kobe-c.ac.jp　http://www.kobe-c.ac.jp/
神戸女学院大学